

國學院大學學術情報リポジトリ

談話室 天国と地獄

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村山, 雅人, Murayama, Masato メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000197 |

『天国と地獄』

村山雅人

表題を見て、黒澤明監督、三船敏郎主演の營利誘拐事件を扱った映画（一九六三）を連想する人がいるだろう。だが、映画の話ではない。ギリシヤ神話の楽人オルフェが毒蛇に噛まれて冥府に落ちた妻エウリディーチェを連れ戻すために地獄に赴き、神プルートに懇願する物語から題材を取った、ジャック・オッフエンバックのオペレッタの題名だ。オペレッタ（小オペラ）は、もとは登場人物が二人の一幕物と決められていた。楽団も小人数で、字義通り小規模音楽劇だった。一八五八年この枠を大幅に超える、多くの登場人物を配し、二幕（後に四幕に改訂）から成る新形式のオペレッタが登場した。オーケストラ編成も無論拡大し、もはやオペラ・ブッフアと区別できなくなった。『天国と地獄』がそれである。

粗筋はこうだ。テーベの音楽院長オルフェとエウリディーチェには、それぞれ恋人がいた。妻の情人は羊飼いいアリスを装った地獄の神プルート。彼は企み通り、毒蛇に噛まれて死んだエウリディーチェを地獄に掠っていく。オルフェはそれを知って狂喜するが、劇中人物「世論」が現れて、妻の生還を主神ゼウスに願い出よ、と彼に迫る。オルフェは世間の手前、洪々従う。世論はギリシヤ悲劇におけるコロスの役割を果たし、ここではモラルの代弁者として登場する。オルフェは世論に伴われてオリンポス山に赴く。ゼウスが独裁の天上世界も良風が乱れ、人間女性の誘拐は彼の所行と疑われていた。だが、プルトの仕業と判明し、ゼウスは彼を面詰するがやぶ蛇になり、独裁に対する神々の不満

が噴出して爆発する寸前、世論の到来が告げられた。事態は急転直下平穏が装われる。ゼウスはオルフェの訴えを聞き入れ、神々を連れて地獄へ降れる。変幻自在のゼウスは地獄でハエに化けて鍵穴からエウリディーチェが匿われている部屋に入り、すぐに彼女と戯れ始め、挙げ句二人でこっそり逃げ出す算段をする。神々の狂宴の最中逃げ出そうとした瞬間、ブルートそして世論と一緒にオルフェにも見つかり、やむを得ずオルフェが妻を連れ帰ることを許す。但し、地上に戻るまで妻を振り向いてはならない、と条件を付けた。世論に監視されているオルフェは振り返らない。当てが外れたゼウスはしびれを切らして雷を落とした。驚いて振り向いた瞬間、エウリディーチェは再び地獄へ、一方オルフェは心も軽く一人地上へ戻る。地団駄を踏む世論。(幕)

このオペレッタは神聖な古典を冒瀆したと批判が上がった。夫婦の純愛物語をパロディに仕立てた意図は、モラルが極度に退廃した、貴族と新興ブルジョアが支配する第二帝政期の社会への批判である。ゼウスは皇帝ナポレオン三世を現し、オルフェは市民階級を象徴する。ところが、槍玉に挙げられたナポレオン三世は自ら希望してこの作品を観て、作曲家に感謝を認めて送った。「オルフェとともに過ごした、目眩のするような素晴らしい夜をいつまでも忘れることはないだろう」と。

この神話を題材にしたオペラは多くある。たとえば、完全な形で現存する最古のもので、史上第二作目のオペラは『エウリディーチェ』と言い、一六〇〇年フランス王アンリ四世とメデイチ家の姫マリアの結婚祝賀の催しとして、ヒロインが無事地上に戻る結末に改作してフィレンツェで上演された。

日本初演は一九一四年(大正三年)帝国劇場だった。その時、翻訳者小林愛雄は原題『地獄のオルフェ』を『天国と地獄』に改めた。秀逸の命題だ！小林は日本のオペラ草創期に『魔笛』や『セビリアの理髪師』など多くの作品を翻訳してオペラの紹介に尽力した人物。

ところで、私は国立の医科大学から移ってきて三一年になる。振り返れば、ある時期まで國學院大學はすべてがゆつたりと流れていた。まるで天国のようだった……

(オーストリア文学)